あるご家族の日頃の心情に、「命の輝き」をかいま見る思いがする

阿部幸泰

託児サポートでは私の妻が長女であるお子さんと係わり、その後、偶然にも私が現職時代の乳児教室で次女であるお子さんと係わった母親の逝去の報に接し、妻が告別式に参列した。会葬御礼の葉書は形式的なものが多いが、そうではないご主人の次の文章を目にした私は、何とも言い表せない思いが……。

「……。自宅の居間で家族に見守られ、長女に手をにぎられながら、眠るようにやすらかに四十三の生涯を終えました。膵臓がんでした。七ケ月に及ぶ闘病生活は過酷に思われましたが、本人は『自分がつくったがんだから、闘うんじゃなくて、仲良くしていくの』と飄々としていました。……。いつも爽やかで明るく、愚痴をこぼしたり、人の悪口を言ったり、弱音を吐いたりしない人でした。次女が白血病になった時、『〇〇さん（注：ご主人の愛称のよう）、苦しい時は苦しみ、悲しい時は悲しみ、嬉しい時は喜べばいいんじゃない』と言っていました。この言葉は、私にとっての□□（注：奥さんのお名前）の人生そのもののように思われます。今、私の目に浮かぶのは、『みなさん、今日は寒い中本当に有り難うございましたー。私、ずいぶん遠いところに来てしまいましたー』とはにかんだ笑顔でお一人お一人に丁重にご挨拶している姿です。」

まだ４３才……、３人の子どもさんはまだ幼少……、しかも子どもさんの一人は難病……。更に、自分はがん……。そして、逝去に際してのご主人の想いの詰まった文章……。

今まで多くの障害児や難病の子どもさんや家族と係わってきたし、今は緩和ケアにも係わっている私が、しばしば耳にすることで、がんを宣告されると「自分がなぜ？」、また、障害児が生まれると「なぜ、我が子が？」という答えのない「生きる苦しみ」に遭遇すると聞く。

一方、緩和ケア関係の書籍に「人それぞれのもつ事情を受容し、人間として生きている証をみることができる」ように寄り添い、支援することが大事との記述を目にする。

日頃からご家族と共に「生きる証」をみようとする、人として、また、母親としての心境が、がんを知っても葉書記載のような言葉になり、自らの力で自らを緩和ケアできていたのではないだろうかと思うのは、あまりにも勝手な推察だろうか。

日頃からこうした心境で過ごしていたご本人、また、寄り添い、支え合い、輔け合っていたご家族の心境、様子を知ると、そこに、「人間として生きている証」、また、緩和ケア“虹”の理念の「命の輝き」に通じるものが、このご家族にかいま見える気がする。

こうしたご本人、ご家族のような方々のことを知ることから、日頃からの生きる営みとしての大事なことを学びたいと思う。